

翻字『奥州征伐記』(三)

藤 沢 毅

A Reproduction of "Oshū-Seibatsuki" (3)

Takeshi Fujisawa

前号に引き続き、『奥州征伐記』を翻字していく。この作品の成立問題などについては、拙稿「絵本平泉実記」の典拠「『文教国文学』38・39合併号 平成10・2発行」に少しく触れてある。

底本略書誌

架蔵本。文政十年写。大本十卷十冊。

標色表紙。左辺題簽、墨書で「奥州征伐記」。

見返し、序、総目録、なし。扉題「奥州征伐記」。

凡例

- ・私に句読点、濁点、「」「」を補い、また段落を設置した。
- ・本文中には平仮名、片仮名ともに使用されているが、特別意図的に強調されている箇所を除き、平仮名に統一した。
- ・か、氏などは、それぞれ「より」「とも」(あるいは「ども」と直した。
- ・一文字の繰返しは、平仮名の場合「ゝ」「ゞ」、片仮名の場合「ッ」「ッ」、漢字の場合「々」にした。複数文字の繰返しは、三文字以上

翻字『奥州征伐記』(三)

でも「く」に統一した。

・漢字は基本的に、現在通行されている字体に統一した。

・明らかな誤写もそのままの形で出し、右に(ママ)と付注をした。

・いわゆる「見せ消ち」の状況は採用せず、修正後の形のみを記した。

・明らかに脱文がある場合は、その箇所(脱文あり)と記した。

奥州征伐記(見返し貼付け丁表)

十本之内 武清(見返し)

奥州征伐記卷之三

- 一 泉三郎忠衡義死并鎌倉勢奥州へ進發、泰衡軍兵着到手配の事
- 一 鎌倉勢奥州へ着陣付和田義盛裁判并三浦義澄、笠井清重等拔駈閑談の事
- 一 畠山重忠大量、熊谷直家直言并伊達大木戸破る、事(1才)
- 一 樋爪五郎高衡謀略付寄手難義并安藤次郎乱箭の中に死亡の事
- 一 鎌倉殿奥州安津加志に本陣を居らる、付合戦の事
- 一 高衡義盛互に謀略を廻す付城兵利を失ふ事(1ウ)(2オ・記載なし)

奥州征伐記 卷之第三

泉三郎忠衡義死 鎌倉勢奥州へ進發の事

并泰衡軍兵手配りの事

扱も泉三郎忠衡は、亡父の遺言を守て兄弟に組みせず、引別れて居城に籠りけり。此故に泰衡大に忿て、厨川六郎俊衡に下知して忠衡が居城を

攻させけるに、泉三郎も命を捨て防戦す。然るに忠衡が妻女は、古佐藤庄司の娘にて武勇の女なれば、此節馬打乗り長刀を打振て敵中へ駈入苦戦する事数剋也。其勇敢（2ウ）男子に勝れり。然れ共、寄手大勢にて搦手を攻破り、俊衡城中へ乗り入りけり。此故に三郎忠衡も『今は是迄也』と夫婦共に自害して死しける故、其郎等共は忠衡夫婦が介錯して首級を火中に投入、皆々自害し、或は刺違、皆悉く死しける故、寄手は俊衡を始め、諸勢平泉へ帰陣しける。

去程に文治四年七月廿三日、二品は奥州退治の為、今日鎌倉を進発し玉ふ。御供には、先御舍弟三河守範頼卿、一条治郎忠頼、板垣兵衛尉兼信、浅利与一家忠、八代三河守常信（3オ）田中兵部少輔義則、逸見冠者、武田兵衛尉有義、小笠原信濃守、平鹿武蔵守義信、田代冠者信連、新田藏人信包、同大炊介義重、他家の輩には上総介忠廣、熊谷小治郎直家、平山武者所季重、岡部六弥太忠澄、佐々木一黨、土肥治郎実平、梶原平三景時父子、宇都宮弥三郎朝綱、八田右衛（門）尉朝家、小山左衛門朝政、同五郎家政、結城七郎朝光、加藤治景廣、大庭平太景氏、比企藤四郎義員、曾我太郎祐信、工藤祐経、愛甲三郎（3ウ）景隆、笠井兵部尉清重、海野小太郎幸氏、三浦介義澄、同平六兵衛義村、岡崎四郎義実、佐原十郎義連、下川辺庄司行平、仁田四郎忠常、千葉介常胤父子、畠山治郎重忠、和田左衛門尉義盛、其勢都合五十余万人。又、御留守居には、北条四郎時政、佐々木四郎高綱、大江因幡守廣元、三善康信入道善信、鎌田藤治俊長、齊院治官親吉等を残されけり。大軍既、東海北陸中仙道の三道に別れて、東海道の大將には御舍弟三河守範頼（4オ）卿、副將には八田左衛門尉朝家、千葉介等、以下八万余人。北陸道は信濃守遠光、武蔵守義光両将、并に佐々木蓮西等也。其勢六万余人。中仙道の大將には比企藤四郎義員、稲毛三郎重盛、其勢三万余人。鎌倉殿は中仙道より向ひ給ふ。軍奉行は熊谷小治郎直家、平山武者所季重両人也。先陣は畠山治郎重忠也。和田左衛門義盛は軍中の事を司り、尤侍所諸士の

別当也。此度の軍に梶原景時を以、義盛の相役とし給ふ。鎌倉引率し給ふ惣軍は三十万（4ウ）七万余人也。

私に曰、頼朝公初めには平家へ捕はれと也、既、誅せられんとし給ふを池の禪尼の歎訴に依て助命し、豆州へ配流せられ、其後義兵を揚げ石橋山の合戦に打負、七騎と也、節木に隠れて辛き命を助り玉へ、斯の如く危急の事共也しが、運強く平家を亡し、日本惣追捕使に任じ、今斯く日本国中の大軍を引率し給ふ事、実や果報伊美敷朝頼卿也。然れ共、残念也しは連枝を悉く誅（5オ）し給ふは何事ぞや。去れば子孫に至て北条に武威を奪はれ、三代にして迹絶へたるは、頼朝卿の不仁故也。

斯て先陣の軍兵、下野国小山に至ると雖、後陣は未だ鎌倉を放れず。斯の如くなれば、泰衡縦鉄城に籠り石門を閉固むる迎も、此勢にては争か攻破らずと云事有まじと、惣軍勇み進みける。理り成るかな、七月廿三日卯の刻より段々出陣して昼夜引も切らず、第七日目に申の刻に及び後陣の和田義盛漸く鎌倉（5ウ）桐ヶ谷を放れけり。

斯て鎮守府將軍泰衡は鎌倉殿大軍にて当国へ責来り給ふ由を伝へ聞き、「此方にては手合せして敵軍を待べし」とて、先泰衡が旗下三万余人、錦戸太郎国衡八万余人、鳥海四郎季衡八万余人、樋爪五郎高衡一万余人、厨川六郎俊衡五万余人、太田冠者経衡、本吉冠者道衡、両勢合せて千五百余人、扱又故秀衡が従弟樋爪太郎俊衡法師が子・伊達冠者義衡、新田冠者隆衡、両勢合て八万余人、泰衡（6オ）が伯父・佐藤庄司一万余人、泰衡が舅・式部太輔基重二万余人、湯野庄司忠治八万余人、并に執権金剛別当秀綱一万五千余人、同下次房太郎秀堅八万余人、同川部太郎高綱五千余人、由利八郎惟平七万余人、伊賀羅目七郎高重七万余人、常陸入道念西父子、田川太郎武久等五千余人、北山太郎忠文五千余人、常陸次郎為重、同冠者為家、合て八万余人、川田八郎九万余人、勾藤八郎五百余人、川北太郎五千余人、其外（6ウ）両州他家の大名廿三

人、其勢五万余人、惣じて両国の軍兵五十九万七千余人の着到也。

然るに、泰衡は平泉の本城に在て、伊達の大木戸へ家老金剛別当秀綱を遣し、鳥海四郎季衡に五万余人を添へて大手白川の関をかためさせ、安津加志山国見沢の手へは錦戸太郎国衡六万余人にて指堅め、搦手出羽の国根津ヶ関は常陸入道念西父子、佐藤庄司等六万余人にて相守る。又、宇田行方ナカカは武文忠文等三万余(7才)人にて守り、輔殿(ナカ)を防がせ、樋爪五郎高衡は弱からん方を助んと遊軍と成て備たり。扱又、両州の城々へ二万三万の軍兵を籠置て「其最寄りくへ加勢せよ」との下知也。又、厨川俊衡、錦戸国衡等が後詰加勢として二万余人、国見峠に備へさせたり。此俊衡は(脱文あり)樋爪五郎季衡は高衡と双子也。然れ共、季衡先へ生れし故四男とす。抑々、此樋爪五郎高衡は智深く謀こと賢く勇有て仁義を守り射芸に達したる上に(7ウ)太刀打も名人なれ共、渠に敵する者なし。異国の孔明にも恥ずべからずの智謀也。勇力は項羽と雖、敵すべきに非ず。去れば、鎌倉殿勢如何様に責るとも中々落城すべしと思はれず。

鎌倉勢奥州へ着陣 和田義盛裁判の事

并 三浦義盛笠井清重等拔駆閑談の事

斯て頼朝卿は同月廿七日、下野の国板橋に着陣し玉へば、宇都宮へ奉幣使を立給ふ。此節御前に紺の直垂を着したる若者、御前に伺公す。政光入道是を見て(8才)其姓名を尋ければ、二品の仰せに

「渠は日本無双の勇士熊谷小治郎直家也」

と宣ふ。入道重て

「何故、日本無双の号有りや」

と云。二品聞し召

「十五歳の時より、父直実に随ひ宇治川一ノ谷にて身命を顧ず大功を立てたる故也」

と仰ければ、入道是を承り、微笑して

「凡武門の身として君の為に戦場に臨んで命を捨て軍するは、士の道なれば珍らしからず。然れ共日本無双とは申難し。勿論彼輩は然るべき郎従等もなき故、自身に手を卸す故に其号有が、政光如き大名は能き家人余多有に依て、(8ウ)渠等が手がらを以、自身の高名とする故に其名顯はれざるや」

と云て、嫡子左衛門朝政、次男五郎宗政、三男結城七郎朝光、有子八郎頼綱等と呼んで

「此度の合戦に於は、自ら粉骨を振り高名を顯はし日本無双の名を得ずんば、速に勘当すべし」と云。

爰にて又、佐竹四郎義宣、今日後れ馳せに参陣して渠が持旗を御覧じけるに、二品の御旗と同じ様に惣白なれば、見間違ふべき条、是を以、印とすべきよしにて日の丸書たるを給はるに依て、はた竿の先き(9才)に指付けるが、今に至り日の丸書たる扇を以て佐竹氏の家紋とす。

爰に下河辺庄司行平と云は、城の四郎永茂が勢二百余人是有る由を言上しければ、鎌倉殿大に驚かせ給へ、和田義盛を召して仰けるは

「城の永茂は平家へ属して頼朝に敵したるに仍て召捕て、梶原平三に預け置と雖、名を得たる勇士なれば此度召具する所也。然るに渠は当時浪人と云へ、殊に囚人同前なれば従者両三人には過べからず。然るに兵卒二百余人召し具せし事心得ず。勿論足下は(9ウ)軍中の事を支度する重職を司る身なれば、詰る事こそ第一に糾明すべきもの也」

と仰ければ、義盛是を承り

「上意の如く、此儀は先達て吟味せしむる所に、永茂申すは『囚人の身なれ共、鎌倉殿の御免を蒙り、此度御陣の御供に召加へ給ふに依て、本国の家人共馳せ参じて凡二百余人に及び候間、右人数の札を下し給はるべき』由、申に依て、何様君の御勢一人也共重なる程味方の吉事なれば、則札を与へ遣す也」

と申す。二品重て仰せに

「渠が兵卒二百余人に千枚の札を与へたるは（10才）如何ぞや」。

義盛畏て

「城の四郎永茂は越後の国一州の守護也。但し、彼国は大軍出る故、千枚の札を与へ候。其心は永茂事、君に敵すると雖、渠縦へ千騎万騎の勢有るとも恐るゝに足らず、と思召て千枚の札を下賜はるは大胆成る御心に敵する事成べからず。却て永茂を帰伏させしめんが為に与へ遣す所也」

と言上す。実や、義盛智謀の深き事言語に演難しと、さしもの永茂も義盛が智勇と権勢の強きは甚だ恐れけり。（10ウ）

私に曰、和田義盛城の四郎に札を与へ、却て渠を帰伏させしを、倩々是を思へ合はするに、豊臣太閤秀吉公茶の湯の大会有りし時、左りには東照神宮、右には大納言利家座し給ふ時、本多忠勝は神君を進め奉り太閤を討奉るべきよしを申上ると雖、神君には非義を行はせ給はざる御名將なれば、曾て是を御信用なし。然るに秀吉公は本多忠勝は神君を進め奉る心を早く推量し給へ、御腰の物を取らせ給へ、仰せけるは「秀吉壮年の頃には長き（11才）太刀刀を好て帶したれども麻壳を指したるが如く思へしか共、諺の如く麒麟も老ぬれば驚馬にも劣ると云へるが如く、此短刀だにも重く覚ゆれば暫く汝に預る也」と、忠勝へ渡し給へば、本多は俄に赤面して惣身に汗を流しけりとかや。去れば太閤は其身を害せんと思ふものに却て太刀刀を渡し給ふは大胆不敵とや云はん。実にや威光凛々たる威勢に石流の本多、勇気を折かれ、扱又義盛（11ウ）も永茂が心を折き傾たるは年暦を隔つと雖、其心は相同じ。

斯て此度惣軍の扶持は白米にし、一人七合宛を定て百五十余ヶ所の竈を補理して兵糧の用意し、勿論一手く奉行人を付て混雜せざる様に、義盛残る所もなく下知しけり。抑々和田義盛は、其生質廉直にして

義信深き故、諸士の面々常に其權威に恐怖しける事斯の如し。又、梶原平三景時も軍中は義盛が相役として諸士の別当（12才）を司ると雖、權威に於ては義盛に似べくもなし。其故は景時は元來其心に己れを立、他人を目の下に見て權威を以、押付んとすると雖、人猶伏せずして何事も伏せず。或る時、義盛は二品の御前に出て軍議を閑談しける迹にて景時一人權威を振い、諸軍を沙汰しけるに六ヶ敷事十余ヶ条有りしを景時則判談しけれ共、悉く滞て一事も埒明かず。然るを義盛、片時の内に裁判しける故、此後は景時助言する事なく、毎事義盛に随ひけり。抑々、此梶（12ウ）原平三景時は、文武両道に通達しける故、二品も御鼻眞に思召、無二の寵臣也。仍て景時は己れ御前のよきを面に顕はし、二品の御威勢を借て他人を従へんと而已する故、結句諸人渠を軽んじて後世に悪名を残しけり。

去程に二品奥州へ着陣し玉へければ、「伊達の大木戸を責破るべし」とて畠山次郎重忠を以て先陣として、彼所に向はしめ、八月二日の夜也しが、「明日早く大木戸を攻破るべし」と諸勢各々其用意頻り也。爰に先勢の中に三浦平六兵衛義村、笠井（13才）三郎清重、工藤小治郎行光、狩野介宗茂、宇佐美三郎、川村千鶴丸、此面々に参会して、密に申合せけるは

「抑々源平の戦ひに無類の高名顕はしたる者共とて其名を残したる輩多しと雖、左の而已大功と云には非ず。先々熊谷直実、平山重忠等が一ノ谷の先陣は後陣の大勢を頼みにしたる故也。梶原平三景時、二度の先駆は我子源太を救ひ助んと思ふに仍て也。佐々木盛綱が藤戸の海を渡したるは案内者有るに依て、田原又太郎忠綱が宇治川の先陣も瀬踏（13ウ）仕たる者有故也。是等をさへ、日本無双の勇士也と諸人称美す。然ればさしも名高き伊達の大木戸を今宵の内に我々の力を以て攻破りたらんには、其功天下に並ぶ者有べからず。先々今夜拔駈して、縦令戸は大木戸に晒す共、名を後世に残して子孫の美目とすべし」

と申ければ、面々聞て「此義尤然るべし」と同意す。其中に川村千鶴丸は未だ幼少なれば、「足下は拔駈無用也」と留めければ、千鶴丸聞て

「凡、戦場に於、長幼の差別は有べからず。達て具し玉はずは、面々の拔駈（14才）を畠山（に）告知らせて妨げすべし」

と云に依て、「左程に思へ詰らる、上は相具すべし」と云。此千鶴丸は生年十三歳也。然れ共、此時の武士は童と雖、敵陣に向て軍するを本意と覺へたりと見へたり。斯て此輩は各々用意して繩を以、馬を括り嘶きさせじとす。但し、面々旗持一人宛を召具して、畠山が陣所の後ろ、峯嶺を越て押行けり。

私に曰、峯嶺と云は「峯嶺」と書たる文字也。諸木もなく禿げ山の峯には此「峯」の字を書く也。惣じて（14ウ）文字には対々有也。

諸木茂りたる嶺には此「嶺」の字を書く也。咽喉の二字は「咽喉」と読べきが如し。

畠山重忠大量 熊谷直家直言の事

并伊達の大木戸破らる、事

斯て三浦義村、笠井清重、工藤行光、狩野宗茂、宇佐美、川村等は忍びやかに畠山が備を出て、備の後通る。然るに此節夜廻りしける本多次郎近常遙に見て、急ぎ本陣へ立戻り主人重忠へ「誰々は拔駈せん為に当手を指置、後ろを押通り候。急ぎ行向て押留め（15才）べきや。又は將軍へ申べきや」と云。重忠聞て少しも騒がず、

「我前方、宇治川或は鴨越^{ヒョトリゴヘ}にて先手に進みしも、他人に先をせられじと心懸たり。然るに其輩は他の備にあらず。皆悉く先手の輩也。重忠先陣を承る上は彼の輩の高名は重忠が手柄成るべし。然るに渠等を咎る時は、重忠は高名せん事を知てするに似たり。唯其俣に捨置くべし」

とて、曾て是を咎めず。実や、重忠の大量斯の如し。外の人ならば遮り留むべかりし。

斯て六騎の輩は大木戸へ押付たれども、城（15ウ）中は鎮り返つて音もなし。仍てすべき様もなく居る処に、齊院親能が養子たる大友左近將

監能直は良従一人を召具して、是又拔駈して此所に来り、彼の面々と一手に成る。然れ共、未だ曾て木戸の開かざれば是非に及ばず。然るに熊谷小治郎直家は、先日小山下野入道が直家に日本無双の号有事を笑ひし故、此度も又大木戸の先陣をすべしと思へ、其身は軍奉行乍、斯拔駈したり。時に小治郎は八人の輩に向て「面々は何故徒に斯居り玉ふや」と（16才）問ければ、拔駈の輩一同に「城兵木戸を開かざる故、是非に及ばず」と云。直家聞て「其義ならば先々某木戸を開かすべし」迎、城に向て大音声に

「武蔵の国の住人、熊谷の小治郎直家、大木戸の先陣也。昔、一ノ谷の先陣せし時は、平家の諸將駈出く武勇を争ひしが、奥州の者共臆したるにや。早く出張して勝負せよ」と呼はつたり。

時に城中にて是を聞、大に怒り、木戸を開て駈出たり。斯て敵味方死を忘て挑み戦ふ所に、城兵（16ウ）匂へ藤八とて六群無双の大力量也しが、工藤小次郎と引組けるが、藤八上に成て既工藤が首を討たんとする所に、笠井三郎清重助来て、藤八が腕をとらへ引倒さんとす。藤八は又、笠井をも捕らいて引よせ一所に少しも動かせず。此時、小治郎直家馳来て藤八が鎧の草摺を疊上て、三刀刺て行光に首をとらせけり。是、今日の一番首也。

然るに工藤行光、首帳に記す節「熊谷直家と某、相討也」と云。直家は又「行光が高名也」と云。時に工藤（17才）小治郎行光云は「勿論、某句藤八組と雖、彼の者大力故、既某を捕て押へ首を討たんとしける所に、笠井清重助来りしが是又組敷かる、時に、直家来て藤八を三刀刺して某に首を討たせれば、相討也」

と云。直家聞て

「足下初めに組たれば社、我渠を刺したり。但し我足下に力を添へ事は全く足下を思ふのみも（の）計りにも非ず。身方の勇士を大切にすることは直ぐに主人鎌倉殿への忠信を思ふ故也。是等は君へ御奉公なれば、首一ツを相討となれば本意に（17ウ）非ず」

とて、行光一人に譲りけり。義盛委しく聞届け、大に感じ

「直家の詞は武門の本意也。如何様親父直家（直実）にも劣り給はず。扱社平山季重は古兵、足下は未だ若年と雖、兩人は並んで軍奉行の仰せを蒙り玉ふ事、係る陰徳成るべし。僅首一ツを相討と言はれんは口惜き次第也。今の詞、千町万町にも替難し。義盛鎌倉へ帰りなば、急度披露すべし」

と云。実や和田が今の詞は則、千町万町の恩賞にも対すべし。

扱又、城兵は勾藤八討死しける故、大に力を（18オ）落して、はや夜も明ければ、畠山重忠大軍を下知して押寄せけり。依て、金剛別当秀綱以下、終に大木戸を捨て退きけり。

仍て樋爪五郎高衡大に怒り、「初ての手合せに大軍と戦ひ挑まず。殊に敵一人も討たざる上、身方の勇士を討たせしは、云甲斐なき事共也。高衡馳せ向て敵を追立べし」と云捨て、大木戸白川の間、荒神坂迎、後ろは深山にて前は海也。其中に細道一筋有て無双の難所也しに、大木茂りたる中に兵を隠し伏せて待懸たり。

然るに畠山以下は手合せの軍に打勝、大木戸を（18ウ）乗り破り、『手初めよし』と惣軍を勇み進んで此所迄押寄せ来りしが、大木を伐倒して道を塞ぎたれば押通る事叶はず。仍て此木を取り除けんと仕ける所に、山上より大木大石を投下して防ぐに仍て、先陣の軍卒三百余人打殺されけり。畠山を見て引取らんとすれ共、後陣の多勢は少しの難義をば知らず、火急に進み押懸る故、退き難く、重忠も『斯ては叶はじ』と後陣へ使を以、繰引にして退きける。仍て高衡は又大木大石にて道を塞ぎ、大木戸を堅めたり。

扱又、二品は再び攻懸るべき由仰ける。時に（19オ）重忠申は「金剛別当が引取るは、戦ひ負たるには非ず。味方を切所に偽り引入て討たんとの謀ごと也。然れば此所は通り難し」と云。義盛聞て

「漢楚七十余度の戦ひに毎度項羽勝利しけれども終に滅亡したれば、左の而己心を勞する事にあらず」

迎、暫時軍事を止て様子を窺ひけり。

然るに山上に細道有り。鎌倉勢は此道筋を知らず。又、高衡は「敵兵若し彼通りを廻りなば、身方の軍難義成るべし」とて、一万余人を分て彼細道へ遣しけり。

然るに和田義盛は近辺を（19ウ）巡見しけるに、昨日迄は深山に諸鳥群り居たる所に、今日は曾て見得ず、其上諸獸も里へ出来るを、義盛見聞しては「扱は山上に道有て敵方より守兵を廻すに仍て斯の如し」と思へ、心中に悦び急ぎ下知して、翌日未明に鎌倉勢又大木戸に押寄せ鯨波を上て責懸りければ、高衡は「よはし」と会釈し乍、白川の方へ引取る。是又鎌倉勢を偽引為也。此節義盛急度工夫して、前方泰衡に恨み有て味方へ降参したる安藤治郎と云者を案内者として（20オ）彼山上へ廻しけるに、案の如く細道有り。此所より兵を進めけるに、高衡が廻し置たる一万余人、思へ寄らざる事なれば、一戦にも及ず敗北して高衡に告ければ、是又大に驚き、「扱は敵軍此道を知りたれば、中々侮るべきに非ず。然らば大木戸にて鎌倉勢を防がん事叶へ難し。白川の関にて防ぐべし」とて、人数を纏へ白川へ退きければ、鎌倉勢は勇み進んで直ぐに白川へ押寄せけり。

爰に錦戸太郎は兄弟と不和に也し故、押籠め置けるが、流石に骨肉同胞の兄弟（20ウ）害すべきに非ず。前方泉三郎忠衡を討たるを後悔して、国衡をゆるして白川の関を守らせける。此節鎌倉勢の先手畠山重忠は白川に押寄せ鯨波を揚げければ、城中よりも武者一騎駈出て大音上て

「錦戸太郎国衡が家の子・熊武と云者也。先々一箭を進らせん」と呼はり射たりしに、其矢、半沢六郎が備場に松の木有りしが、其松の木に中りけり。熊武は「射損じたり」と夫より厳しく射けるに、畠山が軍兵十余人射落され、色めく所に大手の木戸を開て、錦戸（21才）太郎国衡三千余人を従へて駆出ければ、此威勢に辟易して、味方は覚へず二三丁退きけるに、重忠少も退かず、木田、半沢を左右に従へ挑み戦ひけり。二品遙に見玉へ、「すはや重忠を討たすな。続けく」と下知し玉ふ故、鎌倉勢は我劣らじと争ひ進んで苦戦す。

爰に小山左衛門朝政、宇都宮弥太郎朝綱は五十余人を引率して、彼案内者安藤次郎を先に進ませ、樵夫の通ふ細道を押廻りて白川の後ろへ廻りしに、奥州の輩は『鎌倉（21ウ）勢今日初ての軍なれば、後ろの深山へは軍兵を廻すまじ』と思へ、油断して守る兵は勿りし故、小山、宇都宮等が敵の後ろへ廻て山上より柵を目の下に見下して厳しく射懸けるに、其射手の中に諸岡兵衛とて大力の者有りしが、大石を山の上より柵の内へ投下す事夥しく、夫のみならず、小林朝比奈義秀も渠と同伴して此所に有り。此義秀は若年なれ共大人数十人にも動かし難き程の大石を投懸く働きける故、奥（22才）州勢見る間に四五千人打殺されたり。「既敵軍味方の後へ廻る事、何様渠等は凡人にては有るまじ。今は此所守り難し。面々早く引取るべし」と、云捨て、其身一番に馬を馳せて安津加志の方へ逃失せけり。仍て奥州勢は我先にと逃行を、追かけく討取り分捕高名して勇み悦びければ、二品下知し給へ、勝鬨を揚させ給ふ。此時錦戸太郎国衡は臆病を構へて逃帰りける。

樋爪五郎謀略 寄手難義の事（22ウ）

并 安藤治郎乱箭の中に死亡の事

斯て国衡敗走して安津加志へ引とりければ、舍弟樋爪五郎高衡大に忿怒して、「敵軍搦手へ回りし事を聞き臆して逃帰らる、事、云甲斐なし。先々高衡出張して敵を遮り追払ふべし」と、厨川六郎俊衡、太田冠者師

衡兩人を相具して、二千余にて白川へ馳せ向ひけるが、舍弟六郎をば白川と安津加志の間成、荒神坂と云難所に伏せ置、同七郎師衡射手百騎を指添、山上に陣をとらせ、高衡（23才）七百余人を引率して旗を伏せ兜を脱て白川へ来りしが、鎌倉勢は高衡が智謀有る事は未だ曾て知らず。『扱は敵兵戦ひ負て降人に出るや』と思ふ故、猶予しける所に、既半時斗りに近付見侍し所に、思への外隠し持たる旗を押立七百余人居地暗に打て出、駆立ければ、鎌倉勢是を見て「すはや、敵兵余さじ」と、同じく馳向て挑み戦ひける所に、高衡は弱々と会釈し乍、追懸く「一人も通すな」と追行所に、既に荒神坂まで至る所に、隠し伏せたる厨川六郎俊衡は、士卒（23ウ）を下知して俄に起立、鎌倉勢前路を遮り攻戦ふ。抑々は無双の峻嶒にして、殊一騎打の細道なれば、鎌倉勢案に相違しければ急ぎ引返さんとすれ共、後陣の大勢先手難儀は知らず、我劣らじと争ひ進んで押来たる故、人関に成て引取し難し。此図を見て、高衡下知して四方より射懸る矢は雨の如く。此故に鎌倉勢矢疵を蒙る者其数を知らず。仍て身方以の外周章して狼狽騒ぐ所に、六郎俊衡は勇を奮つて戦ひけるに、鎌倉勢大軍と雖も難所へ偽り入れられ、進（24才）退途を失ひ、如何せんと山上を見れば、太田冠者師衡士卒を下知して大木大石を投下しける故、鎌倉勢の先手三百余人暫時に死亡して、半死半生の者は数をしらず。殊に先手の大将畠山重忠苦戦仕ける所に、矢疵を蒙り乍漸々と敵の囲みを切抜、万死を遁れて白川へ引取りける。

是に依て高衡俊衡師衡等も人数を纏へ安津加志へ引取りけるに、泉の柵を通る時に高衡落涙して

「此所は舍弟三郎忠衡夫婦の死亡せし所也。此度の如き戦乱を知るならば、三郎殿（24ウ）を討たせ間敷ものを。古入道殿の遺命を守りしは、兄弟九人の中にて只此三郎殿一人也。哀れ忠衡在世に於は一の能き堅め成べきものを」

と、涙を流して申ければ、俊衡も師衡も俱に落涙しけるとかや。

扱又、小山、宇都宮等は白川の柵を搦手より攻破て、「奥州合戦に第一番の高名也」と自慢して、益々進んで攻入けるに、彼安藤治郎を案内者として此所迄責入を、高衡屹と見て、泉の柵へ取り入、櫓の上に立頭はれ、大音上て

「いかにや鎌倉の面々、聞給へ。樋爪五（25才）郎高衡、厨川六郎衡俊、太田冠者師衡、此所に在り。一軍して返られよ」

と呼はるを聞き、勝誇りたる小山朝政、宇都宮朝綱等下知して両勢一度に攻め懸るを見て、高衡も下知して雨の降る如く射懸ける故、寄手の勇士卅八騎迄射落したり。時に高衡云は

「安藤治郎は故入道殿の大恩を蒙りたる身にて、鎌倉殿へ降参して我々に仇し敵を導く事奇怪也。其上渠を活置ては当国を能知りたる者なれば、此末敵方の便りと也、身方の為何様の害とならんも斗り（25ウ）難し。既大木戸白川の両柵も渠が案内しける故攻破られたれば、早々奴つを射落して腹心の病根を断べし」

と下知しければ、「心得たり」と射手の輩矢尻を揃へて射けるに仍て、安藤治郎が乱矢の中に射られける。依て鎌倉勢は頼に思へし案内者を射られて大に力を落し、氣貶しける所に、厨川六郎俊衡、舍弟八郎道衡等一手に成て駆出し戦ひける故、是に敵すべき様もなし。扱社鎌倉勢四角八面に散乱して逃行けるに、深く頼たる案内者安藤治郎射られし故、寄手は不知案内故、敵国へ攻入べき方（26才）便を失へける故、さしもの小山、結城、宇都宮等の輩も勞して功なく、空しく白川へ引返しける。去れば、高衡が働きに仍て、大木戸、白川等二ヶ所の恥辱を雪ぎて安津加志へ引取り、兄弟心を一つにして彼城を堅めければ、鎌倉勢大軍と雖、容易には攻破り難く見得ける。

斯て寄手敗走に及ぶと雖、既、大木戸、白川は味方の地と也ければ、頼朝卿御悦び限りなく、然れば第一の先陣畠山治郎重忠手を負へたれば、漸く軍事を止めて敵方の容姿を伺はんが為に白川に陣し給へ、三浦新兵

衛尉常盛、梶原（26ウ）源太左エ門景季、一品房正寛、小山五郎宗政、工藤小治郎行光、同左エ門祐経等を御供にて、白川より初めて刈田名取り川等の名所旧跡を御尋、『名社の関を御覧有るべし』とて面々を召して、

「陸奥名社の関と音に聞へし名所にて

吹く風も名こそその関と思へども

道も瀬になる山吹の花

世々の歌人も連ね置し所なれば、見ざらんも本意なければ、倡や至て見べし」

と仰ける。梶原景季畏て（27才）

「程近き所ならば御供仕るべく候らへ共、彼所は遙の奥にして道すがら敵城多く構へたれば、中々通ふらせ玉ふ事叶へ難し。夷賊悉く御退治以後、御帰陣の折から緩々御覧有るべし」とて

寄せ手をば名こそその関と戦ひども

君の威風になびく奥州

斯の如く即席に詠吟しければ、二品殊に御感の仰有り。

去程に錦戸太郎国衡、「樋爪五郎高衡等安津加志の城に楯籠り、夫より此方には敵と云はなし」と注進しけるに（27ウ）仍て、頓て白川を御出陣有て安津加志迄押詰め玉へければ、鎌倉勢も皆悉く押よせたれば、先づ敵城の様子を伺ひ見給ふ為、合戦を始めず、敵と隔事纔二十余丁にして本陣を居へられたり。

鎌倉殿安津加志に本陣居へ合戦の事

文治四年八月十四日二品安津加志の城に押寄給ふ。抑々此安津加志の城は、本城に至る迄に十八曲輪有て、櫓十三ヶ所、木戸八ヶ所、堀深く阿武隈川の流れを堰入れ、木戸毎に橋を置いて馬武者十騎並んで渡る様に拵らへたれば、（28才）恰も四条五条の大路よりも広し。大手の方には

馬の駈場三里余り有。斯の如き名城に楯籠る大將は、錦戸太郎国衡、鳥海四郎季衡、樋爪五郎高衡、本吉冠者師衡等の兄弟四人、都合其勢八万余人にて堅めたり。寄手は十二万余人と雖、先日（29ウ）の軍に或は手負、或は討たれて残る所は十万余人也。此城は白川とは違へ、要害堅固の城也。大木戸白川は櫓有と雖、左而（マ）已堅固にも非ず。

然れば二品当国に入玉へて城郭を攻る、最初の也、足立藤九郎盛長に仰せて、泰衡兄弟朝敵たる事（28ウ）を城兵共に知らしめ、白川の法皇より下されたる退治院宣の写しを旗竿の先きに結び付、先に押立、八月十四日辰の上刻、旭に向て朝恩の程を輝し玉ふ。斯て敵身方の発する鯨波は三十里に響き聞へけり。斯て下河辺庄司行平に仰せて、矢倉に鎗ら矢を射らせらるゝに、其箭櫓の櫓に立たり。此節城中より一の矢は山陰六助と云者射出す所に、味方の先備への櫓に射付たり。此節上総權助高弘上意を承り、一陣に進み大音声に

「清和帝の後胤六孫王（29オ）経基の末葉征夷將軍從二位頼朝卿忝くも院宣を給はり、朝敵泰衡以下を御退治として向ひ玉へ給ふ。仍て御旗の上に院宣を顯はし給へ、朝恩の程を輝す所也。一度拝する輩は必ず冥加を存すべし。況や是に向ひ奉り軍せん者は則 天子に弓を挽に等しく、即刻に天罰を蒙らんより、早く降参して刑を遁れよ」と呼はる。城中にては櫓の上より

「兎角問答せんより急ぎ城攻し給へ。奥州武士の手並を見せ進らすべし」と云。此節錦戸太郎国衡は、

「寄（29ウ）手旗竿に院宣を付て城兵の心を惑はす。いかゞすべし」と云。樋爪五郎高衡聞て

「頼朝院宣を以、奥州勢を帰伏させん為也。又、此方には前方二品の下知として、伊予守殿を退治するに於は恩賞として下総の国を与ふべき由、頼朝の起請文有れば、是を以、頼朝偽りの不義たる事を万人に知らせ、恥辱を与ふべし」

とて、則、平泉へ申遣しける。高衡又、国衡に向て

「大手の櫓より見玉へ。高衡彼の院宣を射落し申べし」

と云に仍て、国衡以下の一族悉く櫓の上に（30オ）有て、見物しけるに高衡は弓矢を携へ、敵陣の体を見渡し居たりけり。抑々鎌倉殿は新調の白旗の上に院宣の写しを結付られしを、高衡是を見て射落さんと思へけれ共、旗を引かれん事を思へ、偽りて

「先日より度々高衡矢を進らするを雖、未だ鎌倉勢に直々に一矢も進らせず。仍て只今一矢奉るべし」

と云も終らず射けるに、其矢則旗竿に結付たる院宣の結目を射切て、余る矢は遙の後ろに備へたる狩野介宗茂が備に落たり。依て、彼の写し秋風に吹散らし、暫く有て（30ウ）工藤左エ門祐経が陣の上に落たり。是を見て城兵八万余人一同に高衡が弓勢感じ誉めけり。扱又、二品は彼矢を取り寄せ見玉ふに、角筈に驚の羽を以、矧たる矢にて十三束三ツ伏せ「奥州の住人樋爪五郎高衡」と記したり。一品の仰せに、

「是偏に我叔父八郎為朝の矢に等し。此矢に当らば何者にても落命すべし」

と仰せける。然るに又、高衡二の矢を番へ、大音声に

「実の院宣に於は 天子の尊威に仍て高衡射る共中るべからず。畢竟不儀の企にて申請らる、院宣成る故、高（31オ）衡が矢先にて地上に落る上は、恐るゝに足らず」

と置る。二品大に怒り玉へ、

「高衡甚だ尾籠也。急ぎ渠を射落すべし」

と仰せける故、射芸の達者八人の中に、信濃の国の住人海野小太郎幸氏進み出て、「縦令高衡何様の鎧を着すとも、射落さずと云事は非らじ」と馬を乗り出し弓箭を番へければ、高衡が「海野小太郎の脇腹を射ん」と、互に懸ひ居る所に、嗚呼の者有て「先々弓勢の程を見玉へ」と射出したる矢、行届かず真中にて落ける故、城兵一同に「鎌倉勢の弓勢も知れた

り」と(31ウ)手を叩て笑へける。然るに寄手は二度の恥辱を蒙り、弥々悶心して怒りけり。幸氏も弓勢の先を折かれ、矢放さず引退く。爰に於、二品大に怒り玉へ、彼者を穿議有りしに、土屋大学義清が郎等李十之丞と云者也。則、獄門に梟られけり。

斯て矢軍終て翌十六日寄手の陣には色々の旗指物夥しく秋風に翻て雲の如し。此節城兵は三方の木戸を開いて駆出けるは、鳥の海四郎季衡五千余騎、本吉冠者師衡五千余人、樋爪五郎高衡八千余人、都合(32オ)一万八千余人、鯨波を揚て打て懸る。鎌倉勢は城兵を取込めて討たんとすれ共、高衡が働き烈しく、半時斗り働きける。爰に武蔵の住人、岡部の六弥太忠澄舎弟・六郎忠綱は、高衡に組まんと駈来るを、屹と見て、高衡左りに開き乍、六郎が鎧の上巻掴んで引倒しければ、城兵駈寄り終に六郎が首を討取り。然る所に城中にては鐘を鳴らして人数を引取らせるに、高衡後殿して繰り引に退き入る。今日の軍に城兵四百卅余人討たれて、手負は二千余人有と雖、名有る士は一人も討たれず。(32ウ)鎌倉方には四百八十余人討たれて、手負は二千三百余人也。其中に勇士と云は、岡部六郎忠綱、庄三郎高家、二人討死す。扱又、城兵引入時、鎌倉勢の中より忍びの者十七人紛れ入りけるが、皆悉く討たれけり。斯て翌日大手の櫓の上に彼首を懸並べて「此輩は鎌倉殿より問者たる故に斯の如く行ふ者也」と札を書いて立けるに仍て、鎌倉殿も「扱は此城疎忽には責難し」と弥々軍評定せられける。

高衡義盛互に謀略 城兵利を失ふ事(33オ)

同月十六日辰の刻より又々軍初て、昨日の如く初めの程は矢軍しけるが、段々に手詰めの勝負に也。然るに此節、昨日平泉に取りに遣したる鎌倉殿の起請文を城中の櫓の上に出して、「是は伊与守殿を討奉るに於は、下総の国を恩賞に給るべき由を書いて、奥には万一事偽るに於は、上は梵天帝釈、下は六十余州大小の神祇の御罰を蒙るべしとの誓言を乗せられたれば、既、六十余州の惣追捕使征夷將軍として位は従二位、官

は大納言たる御身にて偽りを以、人を斗り給ふを、天へ訴へ(33ウ)て恥辱を与へ、且つ昨日院宣を二品旗竿に頭はされたる返報也」と聞へける。斯の如くにして、後、大手の櫓に人を登せて呼ば、せけるは

「只今此前の矢倉に頭はしたるは、鎌倉殿より泰衡へ給はる前の御誓詞也。此起請文の文言には、伊与守殿を討て出し奉らば下総の国を恩賞に賜はるべき由を書かれたり。誠に天地の神祇を驚し奉て、若し偽るに於は件の神祇の御罰蒙らんと鎌倉殿真筆真判を以、是を書き給ふ。然ると雖、御恩賞の事は御沙汰もまぐ、結句当国へ(34オ)御馬を向らる、事、天下の武將には有まじき事也。然れば無用の御誓詞也。仍て御返し申べし、と思へども合戦最中なれば持たせ遣はすべき人なき故、哀れ然るべき御家来に仰付られ、院宣を射たるが如く射落して御取り戻し有べし」と呼はりけるを、二品聞し召、

「尤、謀略の為に遣したる起請文なれ共、其俣に捨置かん事は天神地祇の上覧も恐しければ、誰也共、是を射落し取り戻し候らへ」

と仰せければ、名を指て「汝仕れ」と上意なき故、八州の御家人片唾を呑んで(34ウ)居りけるは理り也。勿論的にも非ず、鳥獸にもあらず、堀を隔て其間遠く風に翻て、貞ならず。殊に一昨日高衡が院宣を見事に射落したる迹なれば、少し也共射損じては弓矢の恥辱なれば、某射らんと云人なし。二品も又名指して仰せなきは、心底に「外れ安く中り難き故、是なし天下の晴れ也」と思召、「若し射損じなば、其者社不便也」との御心故、然れば此節進んで望む人なければ、重て「人数を減じて鎌倉の内にて射手八人の者に仕れ」と仰出されければ、其余の輩は虎口を遁れ(35オ)たる心地しけり。扱又、八人の射手も互に目と目を見合せ、「我社」と進み出る人なき所に、梶原平三景時進み出て

「面々いかなれば上意の御請申上らず、互に譲り合はる、事、心得ず。万一射損じたとて、其身の恥辱のみにて、鎌倉殿の御恥辱には非ず。面々自分の名をおしめ、君命を軽んずるは忠臣にあらず。昔、住吉の八

的をも既、首尾克勤めたれば、急ぎ景季仕れ」

と指揮しければ、此節二品も既、父景時が名指て申付る故、「源太射落し候へ」と仰に仍て、景季は君父の命黙止難く、(35ウ) 梶原源太左エ門景季鞍の上に畏て是を承る。少しも辞する体もなく、馬を乗り出したり。

城兵共は最前寄せ手を欺きたれば、定て能射手出て是を射落すや、と大勢槽に立頭はれ、今やくと見物す。又身方の陣にも、君を始め諸国の大名、梶原一黨は云に及ず、源太を最肩する輩は、息を詰て見物しけり。時に景季馬を五たん斗りに乗りよせて、等しく放す矢は遠鳴して彼の起請文を結付たる緒を射切て、余る矢は城中へ落入て、誓紙は空へ吹上られ、ちらちらとせしが(36オ) 城中へ落たり。仍て梶原が郎等、番場の忠太を始め味方の軍兵一同に替る声は暫時鳴り止まざりし。斯て彼の御誓紙落けるを取上て、景季に渡しければ、則、君へ奉る。二品御自筆なれ共、三度頂き給へけり。時に城中より大手を開かせ、景季が射たる矢を台にのせ指出て橋の真中に指置、外に驚の羽を台にのせて指指、一所に指置き、使を以

「城将等より、只今射芸を顕はし給ふ勇士対面仕り度事有り。是迄御出あれ」

と云。景季聞て、則立(36ウ) 出んとしける所に、

「是全く謀略にして、足下を偽引出して討たんとするならん。必ず出べからず」

とて押止めける時に、景季云は

「左にあらず。景季射芸を顕したれ共、命を惜んで招きに応ぜざりしと云はれるは、是勇功なきに等しく、生れたる甲斐も有べからず」

と振切て橋の上に歩み寄る時に、城の使云は

「城将国衡、季衡、高衡等申越候は、『只今城中へ射落したる矢印に、梶原源太左エ門景季と有るに依て、日比承りたるより猶々御弓勢の程、驚き入候。凡、(37オ) 戦場にては一筋の矢を惜しく覺へ候。仍て、送り

進らする所也。次に御弓勢の程、奥州の者驚入、高衡別して感賞仕り候に仍て、当国の器物、驚の羽一尾引出物として送り進し候」

と云。景季返答には

「足下、歸りて申さるべきは、景季射芸御目に懸候所、感ぜられ、則、箭を送り返され、殊に驚羽一尾御芳志に預り候所、祥に御礼申述んと存ずれ共、重て其城を責落し候半時、此矢を以し只に御返報申入べきの旨、慥に取次給はるべし」

と、互に一(37ウ) 礼を述て別れけり。景季若し此時に出ずんば、万人の物笑ひと成るべし。則、彼驚の羽を御前に持参す。二品の仰せに

「景季の弓勢を感じて矢を返す事、左も有べきか。但し敵方へ引出物を送り越す事、誠に口惜き次第也」

と仰ける時、義盛曰

「是無念の事に非ず。敵乍も景季が射術を感じて是を送る事、尤道理を知りたりと云べし。先日高衡が院宣を射落したる時、鞍鎧等にも送り給ふべきに、奥州殿は夷蝦也と雖、礼儀を存じて是を送り候。君(38オ) は征夷將軍の御身なれ共、道理を弁へ知り給はざるをなじりたるもの也。哀れ、先日御引出物有るべきの事也」

と憚る所なく申ける時に、景季云は

「此驚の羽は希代の品なれば、君の御領に」

と指上奉り、又申けるは

「君には不審の事を仰出さる、もの哉。押付此城を攻落す時、城中に貯へ置たる財宝は悉く君の御家人配分仕るべし。然らば今更高衡が引出物するも、全く残念の事に非らず」

と申ければ、君は義盛、景季が申所も聞し召、一言の仰せも勿りし。(38ウ)

然る所に又、今日も城中より三方の木戸を開て打出る其勢二万余人。其内半ばに過て馬武者なれば、寄手大に驚き、「誠に当国は馬沢山也」と

低語り合けり。今日の軍も鎌倉勢利を失ひ、討たる者多し。此故に義盛下知して、先づ／＼戦を指止め、暫時思案しける所に、其俣に捨置なば宜しかるべき所に、十七八兩日は合戦をせず、十九日の事成るに、錦戸太郎国衡云は

「寄手度々の軍に打負、退かずして怠りたり。此虚に乗て出張りし追払ふべし」

と云。高衡大に制し、(39才)

「城中に籠る輩は気散じ怠り有べし。寄手の痛む事更に有べからず。但し寒中ならば野陣に凍へて働き悪しかるべし。今寒からず熱からざるの時節にして、寄手は少しも弱りたる色なし。然るに身方打出ん事宜からず」

と制しけれ共、国衡更に聞入ずして、三万余人にて無二無三に駈出たり。国衡今日の出立は赤地の錦の直垂に緋威しの鎧に銀の兜を着し、黒の馬に打乗ち、真先に進んで畠山の重忠と火花をちらして戦ひけり。

爰に三浦郎等に越後守義介、加賀(39才)美治郎長清等は、未だ合戦を始めざりしが、能時節に横合より打て懸る。国衡是を見て、三浦の輩と戦ひければ、畠山又横合より切てかゝる故、国衡も又、重忠と戦ひければ、義盛も又横合に射手を揃へて雨のふる如く射懸ける故、国衡大に難義して引入らんと思へども、城中にては態と国衡を懲らすべしとて、鐘を鳴らさざる故、錦戸太郎は散々に戦ひ負て進退途を失ふ所に、城中より是を見て「左而已身方を悩すべからず」逆、合図の鐘を鳴ら(40才)しければ、国衡大に喜び、一番に城中へ逃入けり。高衡大に怒て

「戦ひの図を弁へ知り給はず故、某制し留ると雖、御聞入もなくして打出玉ふ故、誥る不覺を取り玉ふ」

と云。国衡一言の返答も出さず、面目なき体にて

「此以後は万事足下下知すべし」

と云。斯如くなれば、城中堅固にして落べき体も見へざる程に、鎌倉殿

は国衡が方へ御書を以、

「兄弟と雖、泰衡に於ては朝敵也。渠を討て出される社、両州は国衡に恩賞有べし。早く計略を廻さるべし」

と仰(40才)入させられけり。然れ共、流石に不仁の国衡も已前の起請文偽り成るに懲り、高衡を招き是を見せけるに

「能く社見せ給ふもの哉。我等が謀ことに同意し給ふべきや」

と云ければ、国衡聞て

「兎も角も、足下宜く斗らい申されよ」

と云に依て、高衡則、返書を認めて送る。其赴きは「仰下さるゝの旨、委細其意を得奉ると雖、前方下され候御誓詞をさへ破り給へ、既、伊与守殿を討奉ると雖、御約束の増地下総の国を給はるの御沙汰もなく、結局当国へ攻討給ふ上は、仰せの赴き一ツとして(41才)信用仕難し。去り乍、何にても御偽りなき印を見せらるべき」由を返答す。二品是を見て和田に見せ玉ふ。義盛披見して曰

「国衡いかに何の様に悪人也共、最早君の御偽謀を信用仕るまじ。又世上に君程慈恵なき人も有るべからず。増地を給はるべしとの起請文を以て賺して伊与守殿を討たせ、兼約の恩賞は賜はらず。斯て泰衡を朝敵として征伐し給ふ事、渠等が罪何事ぞや。亡父の遺言を背くのみ。今国衡が返答は、君欺き、斗略に落し入れんと工む也。相構て謀略(41才)に乗られ給ふべからず。勿論渠一人が工みならば、国衡も凡者にはあらじ。但し此謀ことを種として此方にて計略有べし」

と申ければ、「然らば義盛宜く計ら意申べし」逆、和田に任せ給ふ故、義盛智謀を廻らしけり。城中にても専ら思慮しける。

奥州征伐記 卷之第三終(42才)